

シルクロード・ネットワーク10周年 横浜は、シルク貿易の一大拠点だった —— 2026年度シルクロード・ネットワークは秩父市で5月23日(土)・24日(日)開催 ——

幕末の安政5(1858)年の日米通商修好条約により函館、神戸、長崎、新潟が開港されることになり、横浜は翌年、開港している。それ以前の日米和親条約(嘉永6(1853)年)では函館、下田が開港しており、鎖国の終焉でもあった。

なかでも横浜は、辺鄙な漁村から大きく脱皮し、国際貿易港として鉄道も整備され大いに発展した。輸出品目のなかでもダントツは、生糸。信州、群馬をはじめ全国から鉄道などで運ばれて来た生糸は品質に優れ、横浜の生糸検査場の高度な検査技術と相まって、欧米で高い評価を得た。生糸はまさに外貨獲得の花形商品となり、わが国の近代国家の躍進を支えたのである。

今日、この輝かしい歴史と文化の痕跡を横浜や全国各地にたどると多くの遺産が息づいていることに気がつく。横浜

では、大さん橋、倉庫群、商社跡、山手西洋館群、三渓園、郊外の養蚕農家などさまざま。しかし、横浜市民はかつて生糸で繁栄した先

進地であったことをあまり知らない。ところが、群馬、信州をはじめとした全国各地では、横浜との結びついた歴史と文化に接することがしばしばある。信州の上田市上塩尻の旧家を訪ねた時のこと、この家は村の庄屋、蚕種業などで財を成した。敷地内には蚕種用の水穴、土蔵があった。ご当主曰く、「横浜蚕室倉庫の株券を今も持っている」と自慢げに話してくれた。横浜とつながっていたことが地域の誇りなのである。

また、日野市にある蚕糸試験場の建屋の保存の相談を受けた。陣内秀信氏(法政大学教授)のお弟子さん上村耕平さんからだった。陣内研究室では、日野の歴史を生かしたまちづくり調査を展開。武蔵野崖線の地に蚕糸試験場の建屋一軒が残っている事を見つけたのである。各地の養蚕拠点には国の試験場があった。そ

の名残が日野市に残っていた。これを保存しようとするには事は動いた。市民運動が花開き、活動が始まった。

関連の講演、シンポジウムを開催し、さらにこの運動を支援する意味もあり、シルクロードネットワーク協議会を立ち上げた。10年前の平成27(2015)年のことで、当然のことながら、横浜で第一回のフォーラムを開催した。この時、力を合わせて歩み始めたのが、NPO法人 街・建築・文化再生集団(愛称RAC・前橋市)である。前橋は、群馬県のシルク産業の一大拠点であり、横浜との取引が盛んで、経済・文化的に結びつきが強い。以来、全国や群馬県内などでシルクフォーラムの開催を続けているとともに、絹文化の歴史を生かしたまちづくり活動などを一緒に推進している。

なお、その後、日野市は試験場の建屋

を取得保存している。

*

さて、令和8(2026)年度のシルクロード・ネットワーク協議会の開会地は、秩父市で5月23(土)、24日(日)の開催。秩父市は、現在2軒の養蚕農家が約300kgの繭を生産している。毎年12月の秩父祭りに秩父神社本殿に繭を奉納する儀式が行われる。秩父は、古くから養蚕業が盛ん。横浜の生糸商人とも結びつきが強いそうだ。師走に行われる盛大な秩父祭りは、豪華絢爛な屋台が引き回される迫力の祭典である。全国の伝統的な祭りは春、夏、秋の開催が定番と思っていた。しかし、秩父は寒く、多忙な師走に開催される。

「なぜ？」一説には、横浜などの生糸商人をもてなす為と聞いた。秩父のシルクフォーラムでその真意を知りたい。

※開催要旨やお申し込みは、ヨコハマヘリテージのホームページをご覧ください。
<https://www.yokohama-heritage.or.jp>



大規模な養蚕農家が息づく群馬県昭和村は、横浜市と姉妹都市



山手西洋館は貿易商の自邸、生糸等の輸出で財を成した



年末に開催される秩父夜祭は、豪華絢爛の屋台が引き回される(写真：秩父市教育委員会)

モーガン邸の再建に向けて

モーガン邸とは、横浜で多くの近代建築を設計したアメリカ建築家J.H.モーガンの神奈川県藤沢市にある自邸のことである。国道一号線に隣接する敷地2000坪に昭和7(1932)年の竣工のスパニッシュスタイルの西洋館が建っていた。しかし、過去2度の不審火を浴び、玄関周りなど一部を残し、他の大部分は焼損した。現在、遺構を保護する目的で上屋を掛けているが、この状態で間もなく20年を迎える。



不審火で焼損したモーガン邸



時を重ねたレバノン杉はモーガン邸の生き証人

モーガン邸は、市民運動体であるモーガン邸を守る会の要請を受け、(公財)日本ナショナルトラスト(以下JNT)と藤沢市が保存を目的に横井英樹氏の別荘であった同邸を当時の祖市所有者である国の整理回収機構から2億2千万円で買い取った経緯がある。

しかし、焼失したことからJNTは文化的価値皆無と判断。再建を中止した。その後、JNTはモーガン邸敷地などを当公益社団法人横浜歴史資産調査会(以下YHG)に寄贈し、再建して欲しいと申し出があった。YHGでは、J.H.モーガン

が横浜ゆかりの建築家で、山手西洋館ペーリックホールや根岸競馬場一等馬見所ほか多くの建築を設計したこともあり、総会で受け入れを決議した。以後、寄付金を基盤にモーガン邸を守る会や藤沢市と力を合わせ復元に向けて歩み始めた。YHGでは、学識経験者と藤沢市民からなる保存活用委員会を設置し、復元計画を推進。なお、所有区分はモーガン邸、隠居家、温室、車庫等、敷地の3分の1がYHG。敷地の3分の2が藤沢市である。

当初は、復元を軸とした文化交流施設としていたが、近年の建設・資材・人件費などの高騰で現実的ではなく、資料展示を伴う住宅の再建に舵をきった。所有

はYHG、日常管理は「NPO法人旧モーガン邸を守る会」である。

現在は、藤沢市と再建の敷地をめぐる、再調整中である。幸い、再建の技術集団のめどが立ち、あとは、再建資金のより多くの確保が急務である。皆様のご支援をお待ちいたしております。



モーガンは横浜で多くの作品を手掛けた。根岸競馬場一等馬見所は白龍

「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄附のお願い

「歴史を生かしたまちづくりファンド」は、皆さまの貴重なご寄附によって成り立ちます。

「歴史を生かしたまちづくりファンド」に造成された基金は、歴史的資産等の調査、修理、取得、管理、啓発等に関するプロジェクトに使用いたします。

横浜歴史資産調査会は内閣府認定の公益社団法人であり、免税団体です。「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄附金は、税法上の優遇措置(寄附金控

●個人：一口3,000円
●団体・企業等：一口100,000円
●振込先：横浜銀行 県庁支店 普通口座 6046423
「歴史を生かしたまちづくりファンド」
【お問い合わせ先】
公益社団法人横浜歴史資産調査会 事務局
〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX: 045-651-1730
E-mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp

「歴史を生かしたまちづくり相談室」受付中!! 皆様からのご相談をお待ちしています。

【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテージ)内
「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX: 045-651-1730 E-mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp

モーガン邸再建へ寄附のお願い

旧モーガン邸再建のために、みなさまに寄附をお願いいたします。一口から何口でもありがたくお受けいたします。

- 個人：5,000円(一口)
- 団体・企業等：100,000円(一口)

ご寄附頂いたみなさまのお名前は、再建した建物の室内に掲示させていただきます。また、金額に応じた記念品をお贈りします。

※横浜歴史資産調査会は内閣府認定の公益社団法人であり、免税団体です。モーガン邸再建への寄附金は、税法上の優遇措置(寄附金控除)を受けることができます。

- 振込先：ゆうちょ銀行 ●口座番号：00270-4-124271
- 加入者名：公益社団法人 横浜歴史資産調査会 ※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください。



撮影：米山淳一

旧・横浜市庁舎行政棟 —— 伝えられるレガシーと記憶 ——

横浜国立大学名誉教授 吉田鋼市

令和2(2020)年の現市庁舎への移転の後、「BASE GATE 横浜関内」と名付けられ31階建ての高層オフィス棟を核として再開発されていた市役所跡地に、旧市庁舎の行政棟がホテル「OMO7横浜」として保存活用される。オープンは今もなくこの春。ホテルの所有者は竹中工務店と東急と京浜急行で、運営は星野リゾート。改修の設計・施工も竹中工務店。「BASE GATE 横浜関内」の再開発全体は三井不動産・東急・京浜急行・DeNAなどの企業グループで実施され、高層オフィス棟の設計・施工は鹿島建設。その高層棟の足元に改装された旧市庁舎行政棟が当初の場所に、当初の外観で蘇ることになる。時に鳴らされていた「愛市の鐘」が吊るされていた屋上の円錐形の籠状鉄塔も保存されている。

旧市庁舎の竣工は昭和34(1959)年。開港100周年記念事業の一環としての5者による指名コンペを村野・森建築事務所が勝ち得て設計を実施。「市の業務を能率的に運営ができ、堅実であると共に国際港都横浜市の象徴として品位あり、市民に親しまれ永く誇るに足る」という市の求める課題に最もよく応えたものとされた。施工は戸田組。プランは、当初は行政棟と議会棟を公共的なスペース「市民広間」でつながり針型であったが、保存されたのはシンプルな矩形のプランの行政棟のみ。

ただし、「市民広間」も一部が復元され、議会棟の家具・調度も一部再利用されるという。

行政棟は鉄骨鉄筋コンクリート造8階建てで、柱・梁はコンクリートの打ち放しであるが、壁面には褐色の特製厚型タイルが張ってある。その壁面にも滑り出しの窓のある部分と無窓の壁面、それにバルコニーを設けて壁面を後退させた部分があり、単調ではない凹凸のあるやや複雑なファサードがつくられている。柱も、上に行くにつれて2階ごとに細くされており、上層が軽快となるよう細かな配慮が見られる。桜木町と磯子を結ぶ根岸線の開通が昭和39(1964)年であるから、竣工時には関内駅はまだ存在しておらず、主入口はみなと大通りに面した側であった。その入り口の上の梁に、小さくて目立たない、それこそ指名コンペ時の市の求める「品位」にかなったとも思える「横浜市旗」という表札が張ってあった。市政業務の増加にともなっていくどか増築をされ、平成19(2007)年から平成21(2009)年まで免震レトロフィットによる耐震工事を施されつつも、行政棟は60年以上も市庁舎であり続けた。そして、令和7(2025)年に戦後の建物としては初めて横浜市認定歴史的建造物となっている。多様な色合いをもつ壁面の褐色のタイルも、近傍のみなと大通りと日本大通りの左右に点在するいくつかの歴史的建造物と呼応してよき都市景観の構成

物となっているからでもあろう。

旧市庁舎は歴代の横浜市庁舎の7代目にあたるが、そのなかでも市庁舎として使われた期間が最も長い。各代の市庁舎は2代目を除いて、いずれも仮庁舎的な存在で、10年前後しか用いられていない。2代目は、開港50周年記念として明治44(1911)年に建てられた煉瓦造3階建てであったが、これも、わずか12年の寿命で関東大震災により倒壊している。旧市庁舎の60年強は横浜市政史の半ば近くを占め、この期間に横浜市の人口は3倍弱となるなど急速な展開を果たしたが、旧市庁舎は常に市政の中核であり続け、横浜市政はここを核に行われ続けたのである。

もう一つ大切なことは、旧市庁舎の場所の重要性である。2代目もこの地に建てられており、木造2階建ての4代目の敷地もこの地であった。7代目を合わせて、合計すれば90年以上も、この地で市政が行われたのであり、明治末以降、この地は常に市政の中核として機能してきたのである。この地はさらに古くは「港町魚市場」が置かれた場所でもある。つまりは魚のみならぬあらゆる食品の市場であり、ハマの台所とも呼ばれ、横浜の食品流通の要の地でもあった。この地は、横浜のゲニウス・ロキの色濃く宿る場所であり、この場所の雲すなわち歴史がまた新たな物語が生まれていくのを見守っていくのである。

歴史と新しさが織りなす関内のまちづくり ～新たな魅力が生まれるまちへ～

関内地区は、安政6(1859)年の横浜港開港とともに発展し、横浜の中心地として歩んできた。街中には開港期の面影を今に伝える歴史的建造物が点在し、異国文化が交差した独自の景観を形成している。現在も異国情緒あふれる飲食店やバーが軒を連ね、港町ならではの歴史や文化が息づいている。こうした歴史的景観や文化を継承しつつ新たな魅力を取り入れ発展してきた点が、関内地区の大きな特色である。

その中心に位置し、関内地区と関外地区の結節点となるのが関内駅周辺エリアである。市庁舎の移転を契機に、新たな横浜の顔にふさわしいまちづくりが進められ、「国際的な産学連携」と「観光・集客」をテーマとした拠点整備が進行している。

その象徴が、旧市庁舎街区の再生である。長年市民に親しまれた記憶と歴史を受け継ぎ、にぎわいを呼び戻し、新たな街の活力を創出することを目指している。旧行政棟を活用したホテルでは、市民広間の大階段の再生や、彫刻家・辻晋堂のタイル壁画が原位置保存されるなど、かつての記憶を未来へとつないでいる。外構では、関内駅とベイスターズ通りをつなぐ「くすのき広場」が再整備され、緑豊かな憩いと交流の空間が誕生した。環境配慮型オフィス、大学、大型ビジョンを備えたライブ施設など新たな機能も加わり、新旧融合した新たなランドマーク「BASEGATE 横浜関内」として生まれ変わった。

近年の関内駅周辺では、横浜スタジアムの改修や横浜 BUNTAI、横浜武道館の整備により、スポー

ツや音楽を楽しめるエリアへ進化した。関東学院大学横浜キャンパスの開校により若者も増えて街に活気が出てきており、地域やプロスポーツチームとのイベントなどの連携も始まっている。「BASEGATE 横浜関内」はこうした施設をつなぐ中心となり、歴史と新しさ、人と人をつなぐ役割を担い、「国際的な産学連携」と「観光・集客」のまちづくりは更に加速されるだろう。

今後も、大通り公園のリニューアルや、「BASEGATE 横浜関内」に隣接する2棟の再開発ビルの建設、海岸通りの横浜郵船ビルを保全活用したホテル、北仲通北地区のホテル・商業施設等の竣工などが予定されている。さらに、山下公園や象の鼻パークなどの水際線では、港町ならではの多様な過ごし方ができる空間整備などが計画され、関内地区は今後も人や企業を引きつける魅力的なエリアとして進化し続ける。

こうした開発と併せ、歩行者が快適に移動できる環境整備も進んでいる。みなと大通りの歩道拡幅や、「BASEGATE 横浜関内」と横浜スタジアムを結ぶ歩行者デッキの完成により、まちは一層巡りやすくなった。訪れる方々には、歴史と新しさが共存する関内の多彩な魅力を存分に楽しんでいただけることだろう。

関内は開港以来、多様な文化が交わりながら発展し続けてきた。これからも歴史を継承しつつ、人・文化・産業が集う横浜の中心として、新たな価値を創造するまちづくりが進められていく。



「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づき、大型案件の認定や「横浜市歴史的風致維持向上計画」の策定や耐震改修工事の助成額の拡充により、例年を大きく上回る8件の工事助成を行い、歴史を生かしたまちづくりに弾みがついている。

歴史的建造物の保全活用が加速！～大型案件の認定、助成数の増加！～

■横浜郵船ビル (近代建築・中区・令和7年5月認定)

正面には16本のコリント式大オーダーの列柱が配され、横浜における古典主義様式建築の最後期を飾るにふさわしい、規模・意匠共に記念碑的な大作である。当時は、日本郵船横浜支店の事務所として使われると共に、客船乗組員の研修所があり、日本郵船のシェフとスチュワードの殆どがここで訓練を受けて乗船したという重要な施設であった。今後は、歴史的、建築的、景観的価値を考慮して外観を保全しつつ、宿泊・レストラン・パンケッタが揃うホテルとして整備を進めており、令和8(2026)年秋に開業を予定している。横浜郵船ビルはおよそ90年もの間、海岸通りにあり続け、特に正面は関内大通りからの印象的なアイストップとなっており、ホテルに生まれ変わった後も地区の歴史的景観を形成する代表的なランドマークとして地域の賑わいを創出していく。



横浜郵船ビル

■三井住友銀行横浜支店 (近代建築・中区・令和7年8月認定)

昭和6(1931)年竣工の鉄骨鉄筋コンクリート造で、クラシック・ルネサンス様式を採用し、本町通りに面した6本のイオニア式円柱や花崗岩の外壁、霞大理石張りの内部意匠など、昭和初期の銀行建築を代表する重厚なデザインが特徴な建造物である。関東大震災後の復興期に建てられ、戦後も接収を免れて創建当初の姿を良好に保ち、90年以上にわたり銀行として利用されており、その立地の継続性という点でも貴重である。また、銀行建築の中でも最も日本大通りの近くに位置し、本町通りの景観の重要な要素となっており、金融施設が立ち並んでいたかつての本町通りの姿をしのべている。今後は、特に歴史的価値を有する外観及び内観の一部を保全する方針とし、創建当初の姿で現位置に復元することで、歴史を継承していく。



三井住友銀行横浜支店

工事助成案件

■横浜指路教会 (近代建築・中区)
外観は、正統的な初期フランスゴシック教会の様式をほぼ忠実に鉄筋コンクリートで表現したもので、プロポーシオンも全体の雰囲気もよく伝えられている。ビジネス街である関内地区において重要なランドマークとして存在感を放っている。
耐震補強のため柱補強工事を実施した。本工事は、令和7(2025)年3月に改定された横浜市地震防災戦略に位置付けられ、市による歴史的建造物の耐震化支援を活用して行われた。



横浜指路教会

■横浜山手聖公会 (近代建築・中区)
イギリス中世初期の伝統様式であるアングロ・サクソン風とノルマン風を混在させた建築様式の特徴を持ち、居留外国人を中心とした日本へのキリスト教伝播の歴史を物語る建造物である。設計者は、旧根岸競馬場一等馬見所等、この地域に優れた作品を残した、横浜にゆかりの深いアメリカ人建築家J.H.モーガンである。正面の鐘塔は、横浜山手のランドマークであり、山手本通り沿いに連続する歴史的なまちなみを代表する存在である。
当初の価値を損なわないよう配慮しつつ、機能維持のため、門柱の改修、外壁修繕及び屋上防水工事を行った。



横浜山手聖公会

■山手26番館 (西洋館・中区)
震災復興期から第二次世界大戦までの間に山手に建てられた西洋館は、戦災や戦後の開発により減少している。その中でも、本建造物は、主屋と使用者が暮らしていたとされる付属屋が併せて現存し、山手本通りに面した数少ない西洋館として大変貴重な建物である。
屋根と外壁修繕及び一部建具復元の工事を行った。修繕・復元にあたっては可能な限り既存部材を活用し、煙突廻り補修においては、ドイツ製と呼ばれるモルタル掃き付け仕上げを再現した。



山手26番館

歴史文化とのタッチポイントづくりを推進！～新たな挑戦が未来を切り開く！～

池谷家住宅再生クラウドファンディング、目標金額を達成！

港北区綱島にある「池谷家住宅」は幕末期(安政4(1857)年)に建築された古民家で、令和6(2024)年度に横浜市認定歴史的建造物に認定された。池谷家住宅は、大規模な改修工事の時期を迎えた。歴史的建造物の改修等の工事には多額の費用が掛かるため、クラウドファンディング型ふるさと納税による寄付を工事費として活用するプロジェクトを、都市整備局で初めて実施した。

◎実施期間：令和7(2025)年10月3日(金)～12月31日(水)

◎目標金額：300万円

本プロジェクトの成功のカギは、魅力的な返礼品の準備、本プロジェクトをより多くの方に知っていただくプロモーションだった。

返礼品は、池谷家の桃を使ったクラフトビールや、歴史的建造物の解説ツアー、横浜赤レンガ倉庫をモチーフにしたnanoblock®など、地域や歴史的建造物に根ざした魅力的な品を所有者にもご協力

いただき、用意した。

また、新聞・テレビなどのメディアに加え、横浜市広報誌、デジタルサイネージ、駅や歴史的建造物へのポスター掲示(港北区自治会町内会の掲示板にも!)、港北区民まつり等のイベントでのチラシやテッシュの配布など、横浜市を中心に所有者、事業者と連携し、PR活動を展開した。なんと、ふかわりょう氏からの応援コメントも!

その結果、およそ40日程度で、目標の300万円を達成することができ、最終的には524万円に達した。

市内在住の方(返礼品無)からの寄付が、想定を大きく上回る結果となり、これは、池谷家住宅への地元綱島の方々の強い応援の表れであり、歴史的建造物への愛着を育むためのタッチポイントづくりとしても、十分な成果を上げることができたと考えている。

皆様方の多大なるご支援に関係者一同、感謝している。



池谷家住宅



綱島桃エール(返礼品)

中山恒三郎家公開事業

都筑区川和町の中山恒三郎家は、江戸期から続く旧川和村の名家で、酒類や醤油の商いを営み、地域経済や文化に大きく貢献した。屋敷には明治23(1890)年建築の書院と明治初期以前に建てられたと言われている店蔵が現存し、横浜市認定歴史的建造物に認定されている。店蔵は二階建て土蔵造りで、前土間型の広い店舗空間や複数の土戸を備え、醤油製造や酒卸を行った商家の姿を今に伝える。書院は本邸に付随する上質な別棟で、関東大震災後に屋根形状を変更しながらも、明治期の意匠をよく残している。

令和7(2025)年10月19日、これら建物を公開するイベントを、所有者である(有)中山松林甫を主催とし、(公財)横浜市ふるさと歴史財団を共催、横浜市を後援で開催した。書院では中山家ゆかりの品々を展示し、諸味蔵では昭和期の民俗資料整理を公開した。店蔵や趣室、八号蔵は外観見学とし、建物の特徴を解説す



イベントの様子(書院外部)



店蔵外観

る案内板も新設した。来場者は501名に達し、地域の歴史資産への関心の高さがうかがえた。焼菓子販売や資料配布も行われ、来場者との交流を深めることができた。本事業は、所有者を中心に、地域団体と横浜市と連携しながら、官民一体となり進めた。今後は資料整理と公開を進め、歴史的建造物の保全・活用を両立させる取組を続けていきたい。

さらに、令和8(2026)年度には横浜市のリノベーション助成を活用し、店蔵の改修工事を実施予定である。歴史的価値を守りながら、地域の人々が集い、活用できる場として生まれ変わる。今後は中山恒三郎家から目が離せない。



イベントの様子(書院内部)

横浜赤レンガ倉庫 nanoblock® で登場! 歴史を楽しむ新たな試み!

幅広い世代・層の方々が横浜の歴史文化に触れ、愛着を感じてもらうことを目的として、横浜市認定歴史的建造物「横浜赤レンガ倉庫」のnanoblock®を販売することとなった。

本取組は、令和7年度から始動した横浜市歴史的風致維持向上計画に掲げている「歴史文化とのタッチポイントづくり」の、歴史を楽しむ新たな展開の一環である。

nanoblock®は、株式会社カワダが製造・販売する、平成20年に日本で生まれた超ミニサイズブロックである。個々のパーツが小さい為、従来のブロックではできなかった繊細な表現や、ドット絵のような表現ができることが特徴。おもちゃを中心に、世界中の人たちに「学び・

遊び・楽しさ・癒し」を届けて心豊かな社会を創造している。

本取組は、株式会社カワダからフリー型共創フロントを通じて、マッチングした。作成した「横浜赤レンガ倉庫」ブロックは、令和8年7月に神奈川・東京の玩具専門店などで販売を予定している。ぜひ、ご自身の手で横浜の象徴を再現してほしい。

今後も、ブロックなど様々な取組を通して、幅広い世代に向けて横浜の歴史文化の普及啓発を進めていく。

製品詳細	
価格	1,210円(税抜1,100円)
販売予定月	令和8(2026)年7月
商品内容	ナノブロック、組立説明書
完成サイズ	W80×H38×D40mm



開港5都市景観まちづくり会議2025神戸大会 ～してきたコト、これからするコト～

開港5都市景観まちづくり会議は、開港の地となった神戸・長崎・新潟・函館・横浜の市民等が集まり、開港都市ならではの歴史・文化などを生かした景観・まちづくりについて考え、交流を深める会議である。平成5(1993)年に神戸で始まり、5都市持ち回りで開催しており、今年度は神戸市で開催となった。

2025神戸大会は「してきたコト、これからするコト」というテーマで令和7(2025)年11月29日～12月1日の3日間開催。5都市から約170名の参加があった。初日の全体会議1では、「ウォーターフロントエリアの現状」や「開港都市の賑わいづくり」といった基調講演に加え、若者世代を中心としたFG(Future Generation)による企画として、長きにわたり開港5都市景観まちづくり会議を支えてきた「レジェンド」から「してきたコト」を伺い、「これからするコト」を検討する上でのヒントを得る企画も開催された。

分科会では全部で5つ。建造物や広告物の景観ルールの運用に注力してきた2地区の取組を、まち歩きを通して考える「①景観ルールが具現化された街並みを見て歩いて、考える」。わずか2ヘクタール内に様々な宗教施設が存在する北野地区を巡り多文化共生を考える「②宗教と景観」。『③“あの日”を歩き、“あす”を描く』では、「震災の記憶」をたどる体験・まち歩きを通じて、防災・減災・復興の視点を共有した。『④「水と酒と癒しの旅路」では、酒造りの「宮水」・温泉の「源泉」、六甲山の恩恵を受けた「清ら



旧居留地区まち歩き

かな水」が育んだ2つのまちの文化や歴史をたどった。また、『⑤まちとみち』では、「まち」の抱える課題に「みち」を使いこなすことはいかに解決するか、神戸において実践している事例と現状の課題を見ながら考えた。

また、分科会後には2つのオプション企画の他、FG企画後編として、「これからするコト」をテーマに、前編でレジェンドから伺った「してきたコト」を受けて、「開港5都市の現状課題の抽出」と、その課題に対して「これからするコト」を議論した。

最終日は全体会議Ⅱが開催され、3日間の振り返りを行い、次期開催都市である長崎市に大会旗が引き継がれた。

3日間を通じ、過去の歩みの中に刻まれた知恵と努力を「してきたコト」として受けとめ、そこから生まれた経験と絆を未来の力へとつなげるために、市民・企業・行政、若い世代が一体となって議論を重ねた。そして、これまでの5都市の歴史を礎に、これからのまちの在り方を持続可能で多様性を尊重する「新たな景観まちづくり」として描き出すことの重要性を確認した大会となった。